第4部 「名所『鳴門の渦潮』の展開」の概要

藪田 貫

この部には大和・佐藤・笹尾・宮崎・モートンの五人の報告を収める。

自然現象としての「鳴門の渦潮」は、文化事象として日本の社会のなかで受容され、定着していったが、それはまた芸能の興行や、メディアの発展、交通ビジネスの展開などによって何度も読み替えられ、近代以降戦後にかけては、外国人の目からも捉えられることとなった。

まず大和報告によると、徳島藩蜂須賀氏によって淡路に設定された身分「道薫坊廻百姓」を取り上げ、約40の木偶廻し座があり、西日本を中心に興行したことと並んで、阿波への興行を通じて、明治から昭和初期に阿波では70近い人形座が活動していた。

ついで佐藤報告は、近代に入って明治17（1884）年に大阪商船会社が設立されて以降の鳴門をめぐる航路と鉄道網の整備、ならびに通運各社による宣伝活動を取り上げる。明治20（1887）年には大阪商船に対抗して阿波国共同汽船が創業し、大正3（1914）年には、外国航路にシフトした大阪商船から独立する形で淡路の船主にも参加を求めて摂陽商船株式会社が設立された。これらは大阪と徳島・淡路を結ぶ航路であったが、大正11（1922）年には阿波と淡路の間を結ぶ阿淡連絡汽船株式会社が設立され、さらに大正14（1925）年に淡路鉄道が洲本・福良間に開通し、京阪神の観光客が淡路島を経由して鳴門へアクセスする利便性が高まった。

こうしたなか、鳴門渦潮観光に力を入れたのは摂陽商船で、昭和9（1934）年『鳴門観潮案内』を発行するほか、パンフレット『鳴門観潮の栞』も発行し、渦潮をワカメ・鯛と並ぶ鳴門の名物と謳っている。それに対し鳴門の側でも、明治39（1906）年、日露戦争勝利記念として鳴門公園の開発に着手し、大正11（1922）年には皇太子裕仁親王（のち昭和天皇）の行啓があった。

戦後には高度経済成長を背景に観光旅行が活性化し、昭和41（1966）年に雑誌『旅』が実施した「新日本百選」に選ばれ、その後、平成21（2009）年の「平成百景」にいたるまで常に選ばれ、観光地・景勝地として鳴門のイメージは定着していった。

こうした観光業を通じた名所・景勝地としての鳴門イメージの形成に対し、笹尾報告は、文学作品に登場するイメージを追及する。「鳴門の渦潮」は、その激しい潮流と対岸に位置する由良要塞と合わさることで、明治30年頃に発刊された少年向け雑誌では冒険譚・修養物語として描かれる。その後、大正から昭和に移る頃には名勝百景に選ばれ、観光地として定着していくが、文学の世界では大正15（1926）年に吉川英治作「鳴門秘帖」が連載

され、大衆ロマンの地として喧伝された。その後、1960年代にかけて映画化され、観光地でありながら、謎をもつ、「何かが起こりそうな場所」として鳴門がイメージされる要因となった。

宮崎報告とモートン報告は、観光地として鳴門イメージが日本国内で形成されていく20世紀にあって、海外の視線が、鳴門にどう向けられていたのかを追及している。

宮崎によればポルトガル海軍の軍人、士官であったモラエスは明治22（1889）年に日本を訪れ、神戸を経て大正2（1913）年に徳島に移り住み、そこで亡くなるが、16年に及ぶ長期の徳島暮らしの理由は、西欧化する東京や大阪といった大都市と異なり、徳島は「真の日本の国の姿をみせてくれる」からであった。日本の風物に惹かれた彼は滞在中、絵葉書を大量に買い集め、書き送っているが、その中に「鳴門の全景」があり、「阿波の国のもっとも有名なパノラマ」「昔行ったことがある」と書き添えている。それは大正4（1915）年のことだが、モラエスは大正13（1924）年にも再度、鳴門を訪問して渦潮を目撃し、そこに「自然の美の極致」「見事に日本的な風景」を認めている。

モラエスの個人的な鑑賞に対し、モートン報告は、元禄3（1690）年のケンペルを嚆矢とし、その後300年間の西洋人による鳴門海峡への記述を紹介する。オランダ通詞付属の医師であるケンペルは、長崎島原の「早崎の瀬戸」と「阿波の鳴門」を日本のふたつの渦巻（Whirlpool）と記しているが、明治34（1901）年日本研究家チェンバレンが著わした最初の外国人ガイドブックである『A Handbook for Travelers in Japan』では、不思議な場所・壮大な光景として特記する。その後、鳴門は外国人向けガイドブックに定番として取り上げられ、昭和22（1947）年の『How to See Shikoku』では、巡礼と並んで表紙を飾る。

一方、昭和22（1947）年、日本の占領軍のために作られた『Japan Today』には、瀬戸内と太平洋を結ぶボトルネックと記され、鳴門海峡は軍事戦略地域として捉えられているが、それは明治36（1903）年、鳴門要塞が紀淡海峡を守る要塞群に位置付けられたことに始る。『How to See Shikoku』は「写真撮影の禁止」を謳うが、実際には由良要塞本部の承認の下に「偉大な渦潮」の絵葉書が発売されていた。また鳴門海峡は軍艦の航行目的から明治9（1876）年以降、イギリス・フランス・アメリカなどの海軍によって何度も調査され、詳細な海図を生み出す一方、「轟音を立てる門」「海獣王国の入口」「日本のカリブデイス」と例えられ、恐れられもした。

（「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会委員）